

「太陽に乾杯」三島由紀夫の生の「欲動」

——三島事件の心的機序の研究②——

安 岡 真

‘A Toast to the Sun’-Yukio Mishima’s Desire for Life: A Study of the Psychological Mechanism of the ‘Mishima Incident’ ②

YASUOKA, Makoto

Abstract

Yukio Mishima, one of the greatest post-war Japanese novelists, travelled extensively from 1951 to 1952, visiting Honolulu, San Francisco, Rio de Janeiro, San Paulo, New York, and parts of Europe including Greece. This 6-month long journey had a tremendous impact on Mishima’s subsequent thinking and, eventually, his way of living. Mishima wrote a relatively long account of his days abroad called ‘The Cup of Apollo’ which was published in 1952. This academic paper deals with the detailed daily descriptions of Mishima’s travels and suggests that during this trip Mishima found himself to be categorized on the side of ‘living’. Mishima keenly realized that he wanted to enjoy his life, to devour the gift of living wholeheartedly. His travels were an excellent chance for Mishima, who considered himself an unexpected survivor of WW II, to experience a rebirth and revive his own strong desire for life. This paper also deals with Mishima’s unique understanding of Greece’s Acropolis, particularly how it reflects his complex approach towards living.

Reviewed by Ted Rybakowsky, MBA, New York University

Key words: Yukio Mishima, the Cup of Apollo, Mishima Incident, Acropolis, desire for life

キーワード：三島由紀夫、アポロの杯、三島事件、アクロポリス、生の欲動

目 次

1. はじめに
2. 旅
3. アメリカの土
4. 「閉じた人」
5. 旅の興趣
6. 笑う三島
7. 自意識と陶酔
8. 小林秀雄の言う言葉の意味—私的概観
9. ヨーロッパにて
10. 心身の平衡
11. 精神の錬磨
12. 太陽に乾杯
13. おわりに

1. はじめに

昨年私は、「三島事件の心的機序の研究——「仮面の告白」の虚偽を中心に——」と題した論文を本学論叢に発表した。三島は昭和20年2月10日に本籍のある兵庫県富合村・高岡工廠において旧陸軍への入隊検査を受け、たまたま引いていた風邪を大げさに言い募って「青二才の軍医」から「肺湿潤」と診断され「即日帰郷を命じ」られた。が、先の論文の中で私はこれは誤診ではなく実はひ弱な三島（平岡公威）を見かねた軍医の「手ごころ」であることを、主に三島の精神の起伏を追うことで、論証しようと試みた。これを論じるにあたり私は防衛省・防衛研究所で旧陸軍の残存資料にあたり、当時の高岡工廠、今は陸上自衛隊青野原駐屯地になった現場へ赴き広報官から図面等を頂き、軍医の軍籍を調べるため兵庫県庁へ赴くなど、「青二才の軍医」とは誰だったのか、明らかにしようと努めた。結果は上記の論文に詳しい。ぜひ、参照されたい。

ところで三島は、母校である学習院高等科を卒業するにあたって、成績きわめて優秀（首席卒業）であったので、時の昭和天皇から銀時計を拝受している。これを「銀時計組」と言うが、この栄えある立場と「肺湿潤」で「即日帰郷を命じ」られ「天皇の軍隊」の役に立てなかった挫折の記憶が作家のなかでコンプレックスをなしたことは十分に想像しうる。1970年11月25日、正午を少し過ぎたあたり、なぜ三島は市ヶ谷駐屯地に乱入しあのような挙に出たのか。この「戦後日本文学（‘文学’を取ってもよい）最大の謎」について、これを三島の精神の起伏に焦点をあてて詳らかにしようというのが、私の目下の主題である。

本稿でもたびたび指摘した通り、生来三島には「死」への傾きがあった。が、これも本稿でたびたび指摘したことだが、そんな三島にも「生」を強烈に希求した瞬間があった。三島事件の、その根幹とも言える彼の「人間」を理会するためには、この「死」と「生」の相剋、むしろ「生の欲動」の在処について考察することがどうしても必要であるだろう。三島事件とは、当代一の人気作家が突如狼藉を働いた、戦後屈指の悲劇であるが、この事件をもたらした作家の心のメカニズムについては、いまだ解明されているとは言い得ないであろう。本稿は、この悲劇に私なりにメスをいれようと試みた、「三島事件の心的機序の研究」の二作目にあたる論文である。

2. 旅

陽の光をいっぱい浴びようと念じたわけではない。太陽とは、ふいに出会ったのである。義務としての旅だった。世界周遊旅行がまだ船舶による時代、三島が、その生涯で初めて祖国日本の地を離れ、外遊を我がこととしたこの当時、横浜港からサンフランシスコ港までは優に二週間の長さを要するものだった。それでも、たっぷり二週間かかったとは言え、まだ三島は幸運だった。なぜなら、三島の一行をその船腹にのみ込んだ客船プレジデント・ウィルソン号（以下、ウィルソン大統領）はそもそも戦時標準船アドミラル・W・S・ベンソン級輸送艦を貨客用に改装した船であって、洋上を21ノットの速力で突っ走る能力を備えていたからである。いざ航海が緒についた初日のこと——1951年12月26日——三島は微笑ましくも次のような感想を書き残している。「千夜一夜物語の筆法によると、この船の生活は一行に尽きる筈である。「それから私たちは、十四日の航海を経て、バグダッドに着きました」¹⁾

そして、三島は当たり前のようにこう付け加えた。「それはバグダッドでも、われわれのように桑港（サンフランシスコ）でも、変わりはない。」²⁾

初めての洋行を前にした、いかにも三島らしい冷めた口吻であるだろう。

私は、その著作を通して三島との対話を続けているうちに、三島を読む行為とはさながら皮を剥がして肉を穿つようなものであると思うに至った。その髄液を顕微鏡にでもさらすに等しい手さばきで精密に観察する必要があると。そう思っただけで「読み」を納得するようになっていく。私は永年文芸の翻訳家として活動してきた。みずからの生業として常に作家を「探す」側に立ってきた。作家の視点と文章（エクリチュール）との距離、これを正確にかつ真つ当に測ることが私の読みの出発点である。そういった分析家としての態度を常にみずからに課してきた。そんな私の経験からすると、多くの三島の文章は実に「微笑ましい」のである。三島は「行為が欠けているから、書く価値がない」と、ウィルソン大統領の船客としての退屈な日常について、三島の言葉を借りれば「抽象的な船客の生活」について、あくびでもかみ殺すように書いている。デッキ・チェアに寝転んで、甲板の上で腕を組んで三島は「衛兵のように規則正しく行ったり来たり」する初老の夫妻の「単調な動物の運動を見物し」、「少なくとも四カ月、私は仕事をしないでもいい。仕事をしていない時のこういう完全な休息には、太陽の下に真裸で出てゆくような、或る充実した羞恥がある。」と嘯いて、あたかもお気に入りの詩人ランボーさながら、ヴォワイアン（見者）を決め込んでいく。

が、しかしこの「太陽の下に真裸で出て」って獲た「充実した羞恥」こそが27歳の三島を一このことについては詳述するが—再生させたこともまた事実なのだ。

三島には生に対する強烈な欲望があった。そしてその強い欲動を「羞恥」と韜晦する精神の傾きがあった。生命讃歌を承認することから遠ざかりそれを「恥」と思い込むうす暗い心の襲っていた。

だがその「恥」を自覚しつつも圧倒的な陽の光を浴びながらみずからの心の底から沸き起こるおらび声を聞き届けることが出来た。これこそがこの洋行の大なる成果であっただろう。

「仮面の告白」の成功で人気作家の地位をすでに手にしていた三島は、朝日新聞社の計らいで特別通信員の資格を得て、アメリカ合州国から南米へ、さらにはヨーロッパへといたる船旅に出たのである。出帆は1951年12月25日のこと。横浜港に浮かぶ船内でクリスマス・パーティーを祝い、翌年5月10日ローマから日本に帰国するという半年弱にわたる長旅であった。ホノルル、サンフ

ランシスコ、ロサンジェルス、ニューヨーク、マイアミ、サンパウロ、リオデジャネイロ、再びサンパウロに戻ってからは、ルアー・アイモレス（ブラジル）、リンス（ブラジル）と周り、3月2日にはジュネーブ（スイス）に、翌3日にはパリ（フランス）にたどり着いた。「太陽！ 太陽！ 完全な太陽！」興奮のおもむくままに三島は書いている。

「太陽！ 太陽！ 完全な太陽！ 私たちは夜中に仕事をする習慣をもっているのに、太陽に対してほとんど飢渴と云っていい欲望をもっている。終日、日光を浴びていることの自由、仕事や来客に煩わされずに一日を日光の中にいる自由、自分のくっきりした影を終日わが傍らに待たせる自由」。³⁾ 横浜を出港してまだ三日目、エメラルド色をしたホノルルの港すらその目に写す前から三島はこのような興奮を身の内に感じていた。ここで三島の言う「太陽」とはあたり一面を海に囲まれて水と光に包まれる中で彼の心に沸き起こった「生きる」喜びそのものであった。そう言ってまず間違いないだろう。およそ比喩としての「太陽」が「生命」以外の何ものかを指し示すとは考えにくいからだ。このとき三島の膚を突きぬけて、その神経の先端まで、陽の光が降りそそいだ。

「今日の快晴と平穏とは、昨夜おそく甲板に出て、かすかにゆれている檣上（しょうじょう）の灯や、頭上のオリオンを仰いだとき、すでに予期されたものである。陸の影も、船の影も、雲の影ももたない巨大なフラスコの内部のような海。このすばらしさは、これから見るどんな未知の国のすばらしさをも凌駕しているように思われる。」⁴⁾ そう書きながら三島はまるで母親からもらったおもちゃ箱を開いてみせる幼児にも似た純白の興奮につつまれていた。もっとも、この excitement の中にすら一条の鱗を感じさせずにはおかないところに、三島の生の所在もあるのだが。「私は今日、日没を見なかった。一日、太陽の面差に見惚れていたので、その老いの化粧を見ようとは思わなかった。」⁵⁾ その三島の眼前に、おもむろに「北米」が姿を現すのである。

ここで三島の気を惹いたのは、この時点でいままなお占領下にあった日本の小説家だからだろうか、ウィルソン大統領に乗り合わせた一人の日系の婦人であった。「お納戸いろの洋服を着て、金ぶちの眼鏡をして、首にレイをかけて、プロムネイド・デッキの窓から、遠ざかりゆくホノルルの灯をみつめている」「六十近い小柄な痩せた女」。「同郷の老いた友人たちとここで別れ、一人でロサンゼルスへかえる」日系のこの婦人を三島はまじまじと観察する。太平洋戦争が始まるや即日抑留され、監房に入ることを余儀なくされた。日本海軍が真珠湾を攻撃するばかりで「米本土に責め上がってこないことを残念がって」、「もしまた、自刃の羽目に陥ったら、みんなで首を括って死のうと相談した」この日本婦人が故国への里帰りを果たし、いまウィルソン大統領の船客となってテレビジョンのある米本土の自宅へ帰るのである。彼女の口から聞かされたこの事実、占領下にあった戦後日本のありようを見、宙に浮かんだような我と我が身の足場の脆さを思ったのであろう。三島は、この日系の婦人に冷え冷えとした観察者の視線をそそいだのである。その「冷えた」視線という一点で、三島はまだ「開かれて」はいなかった。

昭和20年2月10日、旧日本軍への入隊検査を拒絶された三島には、戦勝国アメリカを前にして意識するとも無く首をもたげてきた自然な気負いがあった、と私は解釈している。確かに初めての海外、しかも日本とアメリカが戦端を開くきっかけとなったハワイの土地を前にして、三島の精神が「閉じて」いるのはそのせいだろう。その気負いは例えば次のような描写からも明らかである。「ホノルルは何か用意周到な野趣というようなものを持っている（と、三島は書いている）。あらゆる観光地には、「売られた花嫁」のような野趣、いわば野趣の売笑化があるものだが、ホノルルのはそれとも幾分かっている。それは文明のもたらす生活的利便の、さらに先廻りをして自信をもった、熱帯のあの偉大な自然の怠惰の威力なのである。」⁶⁾ 今ここを引用している私

が学生時代に初めて訪れた外国はホノルルであるのだが、なるほどハワイには「管理された野趣」といったものがあるかもしれない。それを「売笑化」という言葉で呼ぶことも出来るだろう。その光景を前にして「偉大な自然の怠惰の威力」と書き、「生活的利便の」先廻りした「自信」と捉えるあたりに、三島がその裡に抱え込んだ、ひび割れた苦しい自意識が窺えるとは言えないだろうか。ともあれ「私の船の属する会社で発行したパンフレットの……天然色写真の図柄」と同じものを現実のホノルルの街に見た三島の姿は、後年世界じゅうを歩いて異国の風を我が身に感じたエトランジェの私の目からすると、どこか「閉ざされた」、作家にも似合わぬ精神のこわばりと映るのである。

3. アメリカの土

三島由起夫が戦後作家としての自意識を高め「即日帰郷」の屈辱を払って世界へと目を転じたのは、この「アポロの杯」に結実した米欧への旅行がそのきっかけであった。「アポロの杯」はいまなお日本を占領しているアメリカ合州国の文明を、若い三島がどう観察したかというあたりが最初の読ませどころなのだが、アメリカを前に若い三島が少々「構えた」せい、その言葉のきわどいところで彼がアメリカにそっぽを向いていることが端々から窺えて少々鼻白む思いを読む者に感じさせずにはおれない。先の日系婦人へ寄せた冷淡な描写からも明らかなように観察者の鎧をいまだ脱いでいないように映るのだ。それを私はむしろ微笑ましく思う者だが、この「閉じた人」から「開かれた人」への変身——ギリシアでアクロポリスを前にして覚醒した彼の精神の変革——こそが三島を再生させた初の外国体験の効用であり「アポロの杯」の本当の読ませどころであるだろう。

年が変わって52年1月に一行はサンフランシスコの土を踏む。ここで三島がたまたま口にした日本料理屋の味噌汁の不味さ、「がさつな給仕と、一膳飯屋の雰囲気」「顔いろのわるい刺身」の描写は有名である。三島はこう書いた。「身がかがめて不味い味噌汁を啜っていると、私は身がかがめて日本のうす汚れた陋習を犬のように啜っている自分を感じた」⁷⁾ このやや硬直気味のひび割れた自意識（自己愛の傷つきと言ってもよいが）こそ三島と日本とアメリカ合州国との三角関係を絵的に伝える、戦後作家三島がこの時点で立っていた立ち位置であった。

三島の味噌汁はこうして「一国民、一民族の風習」となり、「黄いろく変色した記念写真のよう」に説得力を欠いた「日本人の舌をも閉口させる代物」として印象された。これを比較して後天的に獲得された合州国の「風土を感じさせない」サンフランシスコという土地と隣り合わせてみるや、「二重の不調和、二重の醜悪さ」⁸⁾の象徴として映る。これは三島のコンプレックスである。当時の太平洋航路はすべからくハワイ、サンフランシスコを経路とした。となると、このアメリカ受容は、当時海外へ渡航した日本人がおそらくは例外なく経験した感情とひと連なりのものである。三島の「アポロの杯」は、こうして少なくともアメリカ描写に関する限り、彼の作家が発露される数歩手前にとどまっている。そう感じざるを得ない。

同じ年の1月8日、三島はロサンゼルスへと赴いた。その街を見渡しながら三島はこう書いた。「ハンティントン美術館は英国美術とルイ王朝仏蘭西工芸品と英国古典文学の古文書との注目すべき蒐集を展覧している。ヘンリー・E・ハンティントン氏が一九〇八年から一九二七年にわたる蒐集の公開せられたるものである。

ロココ様式の調度で統一された窓のない仄暗い一室に、ルイ十五世時代の幾多の白粉笥（おし

ろいばこ)や、十八世紀末から十九世紀初頭にわたる英国華胄(かちゅう)界の名華の肖像をえがいた、あまたのメダイヨンが陳列されている。

この一室は就中、ここに佇む人をしばらく夢みさせる。』⁹⁾……

そして三島はこう筆を進める。「白粉管は甚だ精巧な細工を施され、その工人の手は優雅と巧緻の境を極めてい。蓋の一つ一つが檣(ほばしら)の櫛比(しっぴ)する港の光景や、戯れに矢をつがえているおさない薔薇いろの裸のクピイドや、美しい三人の姉妹の肖像画や、古典劇を演ずる劇場の風景や、貴族の男女が緑濃い庭に嬉戯するワットオ風の画面や、狩の動物の密画などで飾られており、細かい宝石をちりばめた色あざやかな七宝や彫金の額縁がこれを囲んでいる。その蓋をあけようにも、これらの白粉管は無粋な硝子の檻にとじこめられているので、手をふれることができない。しかし七宝の鮮やかな緑や庭園嬉戯図の潤いのある夕空の彩色などを見ると、これらの小管の中、たとえば金の小さな蝶番の内側などに、そのかみの白粉のほんの一刷毛ほどが名残をとどめていそうに思われる。』¹⁰⁾

まるで初めて欧州の美術館に足を踏み入れた画家の卵か美学生のような感想なのである。先に書いたように「アポロの杯」は三島の精神に変革をもたらした旅行の記憶である。だがこれが作家初めての旅行記であるなら、旅行記の骨法とはその土地土地の文化、風俗、人間の驚異を描くことにあるわけだから、ロサンジェルスにあって欧州美術のコレクションに殊更に目を向ける三島の筆さばきは、これは相当に脱線した筆鋒であると言わざるを得まい。こう言ってしまえば身も蓋もないが、ウィルソン大統領の船上で日系婦人のうつろう心情に目をとめた三島の目に、サンフランシスコであれロサンジェルスであれ、アメリカおよびアメリカ人の姿は「見えて」はいないのである。

「大英美術館から借用出品のターナーをたくさん見る。ターナーは私をおどろかせた。」「ウィリアム・ブレイクの初版本「ソングス・オブ・イノセンス」を見た。自刻の木版に水彩を施したもので、きわめて美しい。』¹¹⁾さらには、「これを見たことは羅府(ロサンジェルス)における私の最も大きな浄福だと云っていい。』¹²⁾と書く三島にとって、処女地アメリカはいまだ幻想の都の寓意であったかのようだ。

「紐育の印象——などというものはありえない」と三島は書いている。その精神の全的な「解放」を三島はその後訪れたブラジルからヨーロッパへの旅で経験するのだが、いまだ「開かれた人」への途上にあつた彼は、ニューヨークで十日あまりを過ごした後ですら、こう憎まれ口をきく他なかった。「一言にして言えば、五百年後の東京のようなものであろう。……ここでも画壇の人たちは朝から晩まで巴里に憧れて暮らしている。』¹³⁾こうして三島の自意識は、三島の精神を苛んでいた。1950年代のアメリカ絵画を少しでも知るものにとってそれはとても鵲呑みにすることは出来ない評言なのである。

気負いが反転した心理の微妙な綾と、それがもたらす劣等意識三島のシニカルな視線は、間違いなくそこに理由がある。三島はきわめて自己愛の強い人物だった。日本の敗戦と、それに続くアメリカの占領、またその戦中と戦後にみずからは「軍医の誤診」となおい言い張るのであろうが、まったく参与出来なかったという苦い挫折の記憶が三島をして目を「開く」ことから遠ざけていた。人として、作家として、三島はどちらかと言えば二元論の立場に立つものであった。事象を自由に、相対的に見るよりはむしろ直線的・絶対的に捉える傾きがあった。こうしてなおアメリカから「距離」を置き、素直な観察、積極的な受容を強く斥けているのは、つまりは作家の本質に由来すると言うほかはない。こう考えてみると、三島の戦後理解、天皇への振幅の激しさは、この劣等意識(と、その根っこにあつた自己愛)と無縁のものでは無かつたように思われる。

三島は初めて訪れた芸術の都ニューヨークではシアターからシアターへ忙しくはしごしている。メトロポリタン歌劇場ではリヒャルト・シュトラウス作曲のオペラ「サロメ」とプッチーニ作曲の「ジャニ・スキキ（ジャンニ・スキッキ）」を、インペリアル劇場ではミュージカル「コール・ミー・マダム」を、マジェスティック劇場ではミュージカル「南太平洋」を、ヘンリー・ミラー劇場ではコメディ「ムーン・イズ・ブルー」を、さらに映画については封切り間もない黒澤明の「羅生門」を、セシル・B・デミルの「地上最大のショウ」を、エリア・カザンの「欲望という名の電車」を見ている。「知識階級のあいだでは「羅生門」の評判は非常なものである。」この短い一言が三島による黒澤評のすべてである。が、街を歩き、人と交わり、料理屋をカフェをマーケットを、地元のんびりと賑わう八百屋や魚屋や本屋を冷やかしてみると言った異国の風を呼吸しようという行動ぶりは示していない。むしろ、他人の制作した芸術作品を受け身になって鑑賞し、黒澤には（一足先に世界に出た芸術家をやっかんだのか）冷やかかな一言を残し、日本の新劇とブロードウェイの演劇とを比較して論じながら、どちらが様式的で、どちらが拡声器を一切使わないなどと言った些細な事柄を殊更に言い募っている。その精神の動きを追い続けてみると、その真意が奈辺にあったかはともあれ、三島にとって戦後とは何か、世界とはどういう場所であったのかについて思わざるを得ないのである。

4. 「閉じた人」

「アポロの杯」は間違いなく生き生きした旅行記である。特に後半に行くほどにその生気をいや増しに増す、戦後日本の海外受容の有り様をわれわれに伝える第一級の史料である。このことは本稿の後半で詳述するつもりだが、「アポロの杯」という書名は、簡単に言えば、「太陽に乾杯」と言ったほどの意味だろう。ギリシアの太陽¹⁴⁾とイタリアの芸術を一言ってみれば「古典」の助けを借りて三島がその「生」を痛切に発見したという意味で、彼の生涯にほとんど決定的とも言える影響をもたらした重要な旅の記録である。が、およそ旅の始まりにあって誰もが感じる狂熱、興奮が本書にはない。その代わりにシアターをはしごして何と何を見たといった、カラカラに乾いた芸術鑑賞の描写があるばかりだ。「ミュージアム・オブ・モダン・アート（近代美術館）」で三島は「合州国の画家の作品で、心を動かしてくれるものに会いたいと思」い、「ほんの二三點」水彩画家の Demuth¹⁵⁾の絵画に目を留め、さらにメトロポリタン・ミュージアムでは同じ画家による「5の字を大書した商店の飾窓のポジション」¹⁶⁾を眺めている。デムースは同性愛者で対象を精密に捉えたジョージア・オキーフ風の描写に持ち味のある画家だが、その画風は、どちらかと言えば感情に訴えかけるよりはむしろ無機質な描線にその特徴があると言える。この画家の絵を見て「それでいて不吉なのである」と書くあたりに、三島のこわばり、「閉じた人」の心情が反映されている。

三島のアメリカは、こうして客席から眺められた舞台のような、硝子扉の向こう側にいる見物人がようやくとしたためたデッサンのような、冷めた筆致に終始する。旅とは、土地のんびととのぎこちない交わりであるだろう。胃袋に放り込んだ得体の知れないモノであり、目にするのも初めての奇妙な習俗であり、それを見て面白いと悦に入る精神であるだろう。そのためにはみずからが主体となって世界と関わる心の奥行きがなければならないが、サンフランシスコ条約が今にも締結されるかされないかと言ったこの当時、その余裕を作家に求めることは無理だった。三島のアメリカは、こうして、あくまで客の視線、ランボーのヴォワイアンとはまた異なる視点で眺められた幻想の都そのものだったのである。

三島はニューヨークのハーレムを指して「黒人部落」と書いている。それを読んで私は、当時の日本人の海外交流の程度から言って、すこしドキリとはするものの、やむを得なかっただろうと理會する。だが周知の通り当時のハーレムはモダンジャズの全盛期を迎えていた。名だたるプレイヤーたちが夜ごとあちこちのクラブに集ってはビバップ革命を推し進めていた。ブラック・ルネサンスの首府だった。そこを深夜訪れるにあたって三島は（惜しいかな）「白人の友、コロンビア大学のB君」の案内を請い、どうやらヴォードヴィルでも観たのだろうか、「黒人の老優」や「黒人の娼婦」や「黒人のレスビアン」にからかわれ、「黒人の給仕と女給仕が、ピアノにあわせて、古い恋唄をうたう」のを聞き、「女も男も、その声ははなはだ美かった」と書く。ヴォードヴィルを演じる黒人たちをエンターテイナーとして捉え、その芸能を異国の情趣と受けとめて、それを聞き取るにあたって「抒情的な節の哀切さ」などと言って、みずから「開く」のではなく、それこそ目を半目にして眺めやる、その三島のアメリカは残念なことに後年の作家たちが懸命にわれわれの目を開かせようと奮闘してきたアメリカとは異なり、どうにも強ばった、焦点の合わない眼鏡越しに見た半世界のように映るのだ。三島より20年ほど早生まれの作家ウィリアム・アイリッシュは揺籃期にあったビバップの音の氾濫について「幻の女」の中で印象的に描いていた。¹⁷⁾ そのアイリッシュの驚きを、三島が驚くことは無かったのは、これはいかにも残念なことである。だからその「閉じた人」三島に旅の道連れがあったというのははなはだ遺憾なことであったと言わなければならない。すでに見たコロンビア大学のB君しかり、この「壮途」（川端康成）をアレンジした朝日新聞社の出版局長しかり。何より行く先々でパーティに呼ばれ名士と交わり案内人を先導役にハーレムを歩き「インディアン部落」では「車を停めて二十五仙を払って見物する」そのパッケージ旅行のあり方こそ、三島のアメリカ体験を稀積なものにしている元凶であると言わざるを得ない。

だからと言っていいだろう。フロリダを経てブラジルのリオデジャネイロへ向かう機上の人となるや、突如その「閉じた人」三島が言いようのない感動に襲われたのは。煎じ詰めれば三島にとって異国の地は実はここから始まったのだと言ってよい。この瞬間のことを、三島はこう書いている、「しかしリオのこの最初の夜景は、私を感動させた。私はリオの名を呼んだ。着陸に移ろうとして、飛行機が翼を傾けたとき、リオの燈火の中へなら墜落してもいいような気持ちがした。」¹⁸⁾。「私は突然、明日南米へ自分の身が運ばれることを思って胸のときめきを感じた。」南米に入る前日にこう書き、「日本を発ってはじめて感じる旅のときめきと謂っていい」¹⁹⁾と書いた三島にとって、精神的にも物理的にも、興味を覚えるのにブラジルはうってつけの距離だったのだろう。だからこそリオをあたかも恋人の名前のように崇めたのである。

ここ南米で三島は初めて旅を始め旅人の視線を獲得している。プエルト・リコの首府サン・フワンで、機上で知り合ったアメリカ人に教えられた安宿に泊まった三島は「着物を着て、街へ散歩に出た。」

十一時前だというのに、すでに街路は閑（げき）としている。大方の店は閉ざしている。夜の早い町である。街路に人が佇んでいる。傍を通ると、プエルト・リカン特有の鋭い暗い目付でこちらを見る。又別の街角には、身振はまだ少年の名残があるのが、一様に口髭を生やしたプエルト・リカンの若者たちが屯している。かれらは涼んでいるのであるらしい。小公園の前へ出る。先刻の雨に濡れているベンチには人影がない。

映画館の前をとおる。それもすでに閉まっている。看板の電気広告がすでに灯を消して白々と見える。

……MUSICA……

……AMOR……

……APASIONADO……²⁰⁾

5. 旅の興趣

そして「私は突然……南米へ自分の身が運ばれることを思って胸のときめきを感じた。」という興趣が沸き起こるのだ。この描写はおそらく三島がウィルソン大統領で日本を離れてから初めて感じる旅を旅たらしめた旅情であった。街を、人を、外国語をアメリカでは感じることのなかった三島は、ここで初めて旅の孤独と向き合ったのだ。

こうして三島は「開かれた」。いま三島を書く者として私は、三島が旅と出会ったことを衷心より喜ばないわけにはいかない。朝日新聞社まで動かしてやっと実現した洋行が物見遊山から「旅」へと変質したことに共感しないわけにはいかない。旅とはすなわち出会いである。その出会いとは偶然そのものであるだろうが、どんな人と出会い、どんな料理と出会い、どんな音楽と出会い、どんなふうにも街角をめぐり、どんな酒を喰らいどう酔いつぶれどうあしらわれたか、そこに旅を旅した者だけが味わうことを許された運というか、教養の在処もあるだろう。そこにこそ旅に出ることの意味、醍醐味もあると、私は思うものだ。ウィルソン大統領もアメリカ合州国も三島にとっての旅先ではなかった。これは三島の「生」を考える上で殊のほか重要であると思うのだが、三島が南米で異国にあることの非日常を発見し、次いでヨーロッパをその目で見、ギリシアでは太陽を、イタリアではルネサンスの美術を発見したことは、作家の「生」にとってきわめて画期的な出来事であったと言うべきだろう。

事実三島の「アポロの杯」はこの南米紀行から、俄然、深いものになっていく。作家が自身を—おそらくは知らず知らずのうちに—「解放し」旅先の空気と一体化し、だから生み出せたとしか思えない、情味あふれる表現が満ちあふれてくるのだ。

門扉はいずれも閉ざされて、家中が外出しているとみえて、高台にそそり立つどの家も、露台の扉と窓の錠戸を閉ざしていた。古びた塀には風を失った鶯が彫金のように凝然（じつ）としていた。

夢の中に突然あらわれるあの都会、人の住まない奇怪な死都のような、錯雑した美しい、静寂をきわめたあの都会、それを私は幼年時代に、よく夏の寝苦しい夜の夢に見たことを思い出した。都会は塔のように重畳とそそり立っていた。その背景の新鮮な夏空の色と雲の色も同じであった。私は自分が今、眠りながらそれを見ているのではないかと疑った。²¹⁾

唐突に差し挟まれたこの文章の中にあるのは突如みずからの前に立ち現れた環境に向けられた赫突たる「好奇心」であり、その「幼年時代」を「夏の夜の夢」と同一線上に捉える甘やかな幼子めいた記憶である。思い返してみると、その幼年時代に、「猫の喰べ残した鼠は、/湿った枯葉の山にある。」と書き、「其の上に、/枯葉の落ち合ふ音は、/——灰いろの挽歌のやうだ。」²²⁾と書いた12歳の平岡公威の、おどろおどろしい露悪的なまでの表象界と寒々しい悲劇めいた心象風景は、いま、ブラジルの見知らぬ街に佇み沸き起こる旅の興趣に苛まれつつ全身でリオの街との交感を喜んでいる27歳の三島によって見事に乗り越えられたのだ。

このとき痛切な悲哀の念が私を襲った。それもまた夢の中の悲哀に似ていて、説明しがたい、しかも痛切で純粋な悲哀なのである。この現実の瞬間の印象が、帰国ののちには夢の中の印象と等質のものとなること、なぜなら記憶はすべて等質だから、夢の中の記憶も現実の記憶と等質のものでしかないこと、その記憶の瞬間において、私の観念はまた何度でもリオを訪れリオに存在するかも知れないが、私の肉体は同時に地上の二点を占めることはできないこと、(傍点三島)もはや死者が私の中に住むようにしてリオは私の中に住むにすぎまいが、もう一度現実にリオを訪れても、この最初の瞬間は二度と甦らぬであろうということ(以下略)、²³⁾

こうして三島は「荘子の譬は、転身の可能について語っている。」²⁴⁾という認識に立ち至るのである。「われわれは事実、ある瞬間、胡蝶となるのだ。われわれはさまざまなものになる。輪廻は刻々のうちに行われる。大きな永い輪廻と、小さな刹那々々の輪廻と」三島が本来タナトス(死の欲動)を内包していたのは事実であるだろう。だから三島にとっての「生」はこのようにいったん「死を死んだのち」に訪れる「輪廻」として自覚されていた。死と生との往還。栄華も一炊の夢にすぎないという謡曲「邯鄲」の主題を三島はあれこれと反芻していた。「小さな輪廻と大きな輪廻とは、お互いを映している鏡影のようなものである。ひとりわれわれの意識が、われわれをあらゆる転身の危険から護り、空間にとじこめられた肉体の存在を思い出させてくれるのである。」そして「さもなければわれわれは二度と人間に戻らないで、その瞬間から胡蝶になってしまうことであろう。……私は人間の肉体に立戻った。」²⁵⁾三島が旅先のリオでこの街との交感を喜び、この旅で初めて異国にあることの狂熱を自覚しながら、ここで「輪廻」という不可知なものではなく「人間の肉体」を回復したことは、旅のもたらした再生であり、彼の存在にとっての幸いであったと私は思う。旅人にはよくあることだが、彼の意識はどこかへ飛んでいた。タナトスを内包した三島にはそれは輪廻という「死と生の往還」として理會されたはずだが、彼は「胡蝶」にならずに「人間の肉体」を回復した。

それはたまたま通りかかったあるポルトガル人の家族のおかげであった。「三十四五の母親と、可愛らしい三人の娘と、その末娘の手を引いている黒人のアマ……が、その賑やかなお喋りをもって、私の意識をよび戻してくれたのである。」²⁶⁾

たまさかの出会いがある種の「救い」をもたらずのは、まったく旅の効用の一つであった。このとき三島の精神はリオの空を一闪してまさに息を吹き返した。このあたりから再生が旅行記「アポロの杯」の大きな主題となってくる。

それにしても、と私は思う。なぜ三島は、アメリカで感じることの無かった異国にあることの狂熱を、こころに來るなりこうまではっきりと感じたのであろうか。街を見ては「リオはふしぎなほど完全な都会である。」と書き、電車を見ては「リオの市内電車は郷愁的な形をしている。」と観察する。たまたま散策した辺りは「美しいプラサ・パリスの花壇のほitori」であって、「小鳥や馬や象や花籠や巢箱や駱駝の形に刈られていた」庭樹に三島は目を留め、「子供たちに伍して映画館の行列に加わった。」なぜなら「ここでも私は自分の幼年時代に出会った」からである。夢中になってリオの街角を彷徨いながら三島は(と言うより言葉の純粋な意味で27歳の若い平岡公威は)幸福な思いに包まれている。心地よいリオの夜風にくすぐられながら公威は(と、あえてこう綴るが)映画館の行列にまじる。そこでは「短編や漫画にまじって、連続活劇の一卷が上演されていたが、これこそ幼年時代の私の憧れの全部であった」から。

そして、

それは荒唐無稽な冒険の物語で、別の天体の上の奇妙な王国、若い英雄、清らかなその恋人、嫉妬にかられる王女、奸臣と忠臣、眠り薬、地下牢、火竜の出現などからでっち上げられたものである。

私は子供たちの間にまじって、子供たちと一緒に笑った。²⁷⁾

6. 笑う三島

サンフランシスコで「クォ・ヴァディス」(マーヴィン・ルロイ監督)のような重い史劇を観、ニューヨークでは黒澤明の(その時点での)最高傑作である「羅生門」を鑑賞しながらただの一言も批評めいた言葉を残さなかった三島がここリオでは人気作家の袂を脱いで「子供たちと一緒に笑」っている。これはいったいどうしたことか? 何が作家に起きたのだろうか? 何が? それは赤紙を送られていったんは兵隊に取られる覚悟をかため、お国のため天皇のためにアメリカ合州国と戦う運命をみずからに言い聞かせたはずの公威が、「青二才の軍医」の手心でその日のうちに、——入隊検査の直後に、——帰郷を命ぜられてドッと安堵したあの時の思い、その思いがあったからこそ初めて敵国アメリカの土を踏んで「構えて」しまった—その「構え」が、いま解き放たれたからに他ならない。その時の強ばりが三島の人生の端々で顔を出し彼の人生の決断と行動を決定していく。そしてそこに三島の生と死の相剋、エロスとタナトスのせめぎ合いの秘密もあった。そう私は理會するのだが、書かれたことではなく書かれなかったことにこそ読み取られるべき真実があると、いま私は、三島を書く者として考えたいと思う。だからなのである。北米紀行と題された文章の中からうかがわれる体温の低さ、自身を取り巻く環境への冷淡さと、太平洋の裏庭として形だけは第二次大戦に参戦しながらも、その心理的距離から徴兵忌避者のコンプレックスを三島に感じさせなかったブラジルとでは、旅人として味わう開放感も大きな開きがあったのだ。

「閉じた人」三島はこうして「開かれた」。三島の耳には「近づいてくる太鼓の音と歌声」が響いていた。謝肉祭(カルナヴァル)である。「太鼓と鑊鉞(にようはち)と呼笛(よびこ)の単純な音楽が歌声にまじっていよいよ近づいた。曲はおそらくサンバである。」まさしく旅人の耳に響く音楽を、三島は心地よく聴いていた。

こうして三島はリオを、ブラジルを生きた。それは作家にとってどれほど嬉しかったことだろう。彼の精神はどれほど解き放たれ、どれほどかなたを飛翔したことだろう。一人で異国を旅したことのある者ならだれもが覚えのあるあの言いようのない、自由に心が飛び回るあの思いを三島も味わっていた。このあたりからである、三島が夜の縁日をうろつく少年のような好奇心で異国の街路を闊歩し、アパートの二階を見上げ、モザイクの歩道を面白がり、「エレガんな女たち」や「たたんだビーチ・パラソルを抱えて駆けてゆく裸の子供たち」に暖かな視線を向け始めるのは。

すでに書いたように三島の旅に道連れがいなかった訳ではない。朝日新聞の特派員がつかず離れず付きそっていた。異国に暮らす邦人らとの交流もたえずあった。だが異国をゆく三島の視線はこの人らの不在の時にこそ自由にあたりをためつすがめつし、自在な感興を作家の内面にもたらすのである。旅において、ただひとりあることの効用であろう。

入隊検査で「肺湿潤と誤診」されて即日帰郷を命じられた昭和20年2月10日から7年目の、昭和27年2月13日付の川端康成宛書簡一

南米へ来ると、ブラジル人の呑気さ加減がすっかり気に入りました。こんなに気のいい連中はなく、在留邦人たちにしても、何しろ何億といふ金をもつてゐる人はざらですから、皆大きな顔をしてゐて気持がよく、ハワイや米国西海岸の卑屈な一世二世とは比べものになりません。第一教養もあり、日本に一番ちかいホノルルの連中よりずっと日本のことを知つてゐます。²⁸⁾

ここにあるのは、アメリカでは意識することもなく傷ついていた三島の自意識が見事なまでに回復している事実、これである。三島はこの後、ブラジルをぐるりと周り、再び訪れたりリオデジャネイロで謝肉祭を体験して陶酔するが、ホノルルやサンフランシスコで感じた自意識の傷つきと、リオで得たその再生ほどこの旅行を作家にとって意味あるものにした体験もなかっただろう。川端康成へ宛てて手紙を書いてから10日後の2月23日、三島は書いている。

私は四晩の内三晩を、二晩はナイト・クラブ「ハイライフ」で、最後の晩はヨット・クラブの舞踏会で踊り明かしたが、別段白人に生まれかわりたかったためではない。カルナヴァルの陶酔は、これをただ眺めようとする人の目にはいくばくの値打もないからである。その結果、私は正直に自分が陶酔したことを告白したい。²⁹⁾

7. 自意識と陶酔

このとき得たカタルシスが三島をしてギリシアの太陽を受けとめてイタリアでは作家がルネサンス美術へ目を見開かせる触媒となった。よほどこのカルナヴァルの陶酔が気に入ったのだろうが三島はサンバの舞踏を歌舞伎の花道とひとしなみに論じ、³⁰⁾ このときの経験を「快楽のあとの目ざめ」「あのルバイヤットに歌われている「死」の如きもの」と讃えている。

「右手に経典、左手に酒杯」で知られるルバイヤット（ルバイヤート）は中世イスラム世界における死と生を主題とした11世紀ペルシアの詩人ウマル・ハイヤームの四行詩集のこと。三島がカルナヴァルを見て「死」を象徴するハイヤームの詩を連想し、併せてその精神の中に「群衆」と「死」と「踊り（芸能）」が整然と連続してあるものとして意識しているあたりは面白い。いま三島について書いている私は、後年彼がみずからの死を加速させるきっかけとなった私兵「楯の会」は、演出家として数多の役者を自在に操り、ひとつのカタルシスを創造しかつそれ眺めて悦に入る彼の嗜好、その「職業経験」が別の組織に所を変えただけではなかったかと想像する者だ。本来作家の中にあつたタナトスが、カルナヴァルという生の爆発の最中にひょっと顔を覗かせて、一気に「死」を連想するあたり、この推測もあながち間違つてはいないのではないかと改めて意を強くする。死に裏打ちされた生、生の向こう側に垣間見える死、そこに人間三島の哀しみがあつた。

そしてそのエロスとタナトスが、この旅の最中、イタリアで、彼をあの有名な絵画に出会わせることになるのである。すなわち「仮面の告白」でも著者の性の目覚めをつかさどる重要なモチーフとされたグイド・レーニ作「聖セバステイアンの殉教」図に。この絵については、いずれ詳述するつもりだが、これは一部の論者によってそう主張されているように、同性愛者の守護聖人などではない。

三島は昭和23年11月2日付の川端康成宛書簡で「本当に腰を据えた仕事をしたいと思つてをります。」と書いている。「仮面の告白」という仮題で、初めての自伝小説を書きたく、ボオドレエルの「死刑囚にして死刑執行人」といふ二重の決心で、自己解剖をいたしまして、自分が信じたと信じ、又読者の目にも私が信じてゐるとみえた美神を絞殺して、なほその上に美神がよみがへ

るかどうかを試したいと存じます。』³¹⁾ この「仮面の告白」は「自分が信じた美神を絞殺する」という口吻から、また自己を神話化しようと目論む三島一流の操作も手伝って、そこに書かれた事象はすべて「真実」であると主張する声が、なお一部の論者のあいだにはある。相当の批評家の中にもなおそう信じる向きがないではない。が、ガイド・レーニ作「聖セバステイアン」図の実相と、三島が「これ」と主張する「聖セバステイアン」図の幻像と、また「仮面の告白」に書かれたこの絵の有り様とは、どれもまちまちであって、それだけでも三島の言の不確かさと言うか、あえて言えば彼独特の虚言癖（＝大言壮語癖）を感じさせないではおれない題材なのだと考えられる。

三島は「ヨット・クラブのカルナヴァル」を楽しんだ後、つと立ち寄った「ヨット・ハーバア」にのぞむ庭の椰子のかけで、女同士のある痴話喧嘩を目撃する。金髪女と栗毛の女が「髭を生やした好い年配の大男」を取り合って、つかみあい罵りあっている。この喧嘩は「太った黒衣の中年婦人」が「仲裁役を買って出」て、その機転のおかげでようやく矛を取める。その場から連れていかれる女ふたりを満足げに眺めやるやこの婦人は「みんなの注目を浴びながら胸に十字を切って」その場を後にした。三島はこの一部始終を観察した上でこう書いた、「この土地の人には、それは本当の喧嘩を見る喜びに他ならないが、私にとっては、むしろ伊太利喜劇の一齣をみるたのしみであった」と。³²⁾

いよいよヨーロッパへ向かう日がやって来た。

* * *

ここで本論の主旨からはやや逸れるが、三島もその世界の住人であった「言葉」の意味について、批評家小林秀雄の定義を引きながらざっと考察しておく。これは本稿の筆者がそれをどう考えているかについて触れるものであり、ひいては私の三島論とも響いてくる筈だから。

8. 小林秀雄の言う言葉の意味—私的概観

私は、パリへは何度か行ったことがある。長年アメリカを行き来し、職業的に英文のテキストに触れて、文芸翻訳などを生業としてきた私が初めてその目で見、その空気をふかぶかと吸って、広い世界がアメリカ以外にもあるのだなとあらためて感じさせてくれた最初の街が、パリだった。

日本の大学でフランス語を教える講師の知人が餞別代わりに彼の書いた文法書をくれた。それをばらばらひろい読みし、フランス語は入りやすく出やすいと言った、私の大学時代に教師から聞かされたことばがふと思い出された。つまりフランス語は割合に簡単な外国語だと言うのである。その教師はさらにドイツ語は入りやすく出やすい、英語は入りやすく出にくい、ロシア語は入りやすく出にくいと言った。この話を聞かせてくれたこの教師はソ連大使館とも関わりのあるロシア語の専門家だったが、当時ロシア語の初級学習者であった私の語学に対するほんやりとした不安にこのことばはスッと応えてくれて、いまだに折に触れて思い出す。

ところで批評家の小林秀雄は本居宣長の「姿ハ偽セガタク、意ハ似セ易シ」ということばを引いて、「言葉は真似し難いが、意味は真似し易いと言ふのである」と書いた。「普通の意見とは逆のやうで、普通なら、口真似はやさしいが、心は知り難いと言ふところだろう」と。ここで言葉と言うのは「古歌」のことで、つまりは万葉集のことである。

ある人が宣長に言った、「近頃世のオ子どもが古を学ぶと称して歌をよんでゐるが、そのよみ出すところを見れば、なるほど姿詞は古歌に似てゐるが、心は俗に近く、古とは大違ひであり、誰

にでも一見して似せ物とわかる、笑止な事である」³³⁾と。その人は宣長に当てつけてこう言ったそうだが、宣長はそれに応えて、「試みに、私のよんだ万葉風の歌を、万葉集の中に、ひそかに交へて置いたら、君にはこれを弁する事が出来まい」。そう反駁した。「これが予の歌、これが万葉の歌と言つて見せれば、必ず予が歌を似せ物と言はん」と。そして「姿は似せ難く、意は似せ易し」という、いま引いたことばに巡るのである。この話はその後ひろびろと範囲を広げて、西洋のデモクラシイにまで話はおよぶのだが、それはともかく、小林の考えるこのエピソードの要諦はこうである、「そんな事を豪さうに言ふのなら、本当の事を言つてやらう、言葉こそ第一なのだ、意は二の次である」と。

この話はわれわれ外国語の専門家にとっても実に含蓄に富んだもので、よく味読し玩味すべき内容を含んでいる。宣長の言う言葉、すなわち「万葉の歌の調べ」は、これを宣長の時代のひとが万葉に似せて歌おうが、歌うまいが、それが読む人に古の気分を与えようが、与えまいが、「君の眼前にあるのは、全く類似した感動を君に経験させてゐる二つの言葉の姿だけではないか」。「言葉こそ第一である」と、小林秀雄は本居宣長の「本当の事」を彼に成り代わってこう代弁したのである。

古の万葉の歌の調べと、宣長のよんだ万葉風の歌。どちらも感動を君に経験させたという点では二つの（別々の）言葉にすぎない。さて私がごく私流にこの話を解釈するとうこういうことである。つまり言葉は相手の耳をつかまえてこれを開かせることが出来ればもうこっちのものである、その「意」（本来言わんとした内容）などは二の次なのだ。なぜなら「言葉こそ第一」なのだから。とうこう考えると所謂外国語恐怖などはこれできれいさっぱり拭い去られるのではないか。

異国の地にあつて、言葉が不確かな者どうしの意思を疎通させるゆいいつの手段は、まさに小林の言う「言葉」である。そこに万葉集と外国語の差はないと思われる。

三島は初めて見るヨーロッパにあつて、どのような言葉への思いを抱いたのだろうか。作家はこのことについて「アポロの杯」ではいっさい触れていない。若い小説家三島の胸に浮かんだ米欧の言葉とは、果たして――

以上余談であつた。

9. ヨーロッパにて

さて1952年3月3日、三島はスイスのジュネーブへ入り、チューリッヒを經由してパリに入った。パリの土を踏んで三島がまず向かった先は地元のサーカスだった。パリ有数のサーカス団、ル・シルク・メドラノで、フェリーニの映画にも取りあげられた馬による曲芸を見て、そのアクロバチックな技の数々に目を見張った。よほどこの曲芸が強い印象を残したのだろうか、人と馬によるアクロバットを見て三島は「肉体の危険」と「精神の危険」という二項の対立を思い浮かべている。肉体の危険に人はたびたびその身をさらすが、それと同じように精神の危険に出くわすこともしょっちゅうである。「そのときわれわれは曲芸師のようにかくも平衡に忠実であろうか」。もし「曲芸師が綱から落ち」るように「われわれが自ら精神の平衡を失」ったら、それは目に見える出来事ではないだけに「危険は多くかつ（結果は）重大」³⁴⁾であるだろう。

続けて三島は、

曲芸師は肉体の平衡を極限まで追いつめて見せる。しかしかれらはそのすれすれの限界を知っており、そこでかれらは引返して来て、微笑を含んで観衆の喝采に答えるのである。かれらは決して人間を踏み越えない。しかしわれわれの精神は、曲芸師同様の危険を冒しながら、それと知らずにやすやすと人間を踏み越えている場合があるかもしれない。

と、論じた上で—

思惟が人間を超えるかどうかは、困難な問題である。超えうるという仮定が宗教をつくり、哲学を生んだのであったが、宗教家や哲学者は正気の埒内にある限り曲芸師の生活智をわれしらず保っているのかもしれない。もし平衡が破られたとき実は失墜がすでに起こっており、精神は曲馬の円い舞台に落ちて、すでに息絶えているかもしれないが、そののち肉体が永く生きつづけるままに、人々は彼の死を信じないにちがいない。³⁵⁾

私は精神医学的な意味でこの用語を使っているのではないが、この描写から窺われるのは三島の精神が分裂していたという事実、これであろう—三島はこの日からほぼ7年前、兵庫県の富岡工廠で「青二才の軍医」に同情されて旧軍への入隊を拒絶され即日帰郷を命ぜられた。幼少のころは、よく知られた話であるが、実母・倭文重から無理矢理引き離されて祖母・なつの手で育てられた。覚悟をきめたはずの戦場の死を免れ、幼い頃には母と祖母との間で引き裂かれていた三島の、度を過ぎたまでの他者洞察、他人を隅々まで観察し理解しないではおれない性向は、おそらくここにその淵源があるだろう。みずからを苛んでいた自分が二つに引き裂かれているという恐怖。ここで平衡を取らなければ、その母と祖母のいずれをも傷つけてしまうという思い。本稿はあくまで1970年11月25日に起きた「三島事件」の心的機序を追究することが主眼であるので、三島の精神において想像されるこうした分裂に今は深入りはしない。が、旅先で外の世界にフォーカスせず、演劇や曲馬などを見て「肉体の危険」と「精神の危険」という観念が湧き起こってくる三島の精神世界の、その二項対立が、彼の世界観の中枢をなしてひいては彼の「生」と「死」を決定づけることになった、そのメカニズムを理會しておくことは有益だろう。このことは指摘しておく。三島はパリで、あくまで芸能にその関心をふり向ける。心が外の世界にフォーカスしていないからである。三島は周知の通り英語のかかなりの使い手であった。だが「アポロの杯」のどこを読んでも、三島が外国語で苦勞したという話はいっさい出てこない。異国でまず目に入るはずの人の姿も、大通りの賑わいも、路地裏の暗闇も、異国の言葉が飛び交うカフェも、宗教建築もレストランも、作家の目にはけっして映らない。心がそれを見ていないからである。異国ではまずおのれを護るようにして「閉じて」しまう作家の心性が、ここからも窺うことができるのだ。

いま引いたとおり三島は右の二項対立を受けてこう書いた。「思惟が人間を超えるかどうかは、困難な問題である」と。「超えうるという仮定が宗教をつくり、哲学を生んだのであったが、宗教家や哲学者は正気の埒内にある限り曲芸師の生活智をわれしらず保っているのかもしれない。もし平衡が破られたとき実は失墜がすでに起こっており、精神は曲馬の円い舞台に落ちて、すでに息絶えているかもしれないが、そののち肉体が永く生きつづけるままに、人々は彼の死を信じないにちがいない。」³⁶⁾ こうしてパリは、三島にとって、肉体と精神の平衡がきわどく保たれたサーカスとしてまず体験された。これはきわめて興味深いことである。

10. 心身の平衡

私は、大通りや路地裏ではなくサーカスを、宗教建築や異国趣味のカフェではなく、鼻先にゴム鞆を乗せて同僚とキャッチボールをする海驢（あしか）や「組合わせた十五の椅子を、口で支えてみせる男」をまずは面白いと感じた作家の、さながらポツと出の観光客めいた物見遊山ぶりをとやかく言っているわけではない。そうではなく、曲芸を見て肉体と精神の平衡を思い、海驢の柔軟な訓練された肉体を見て、「危険はわれわれの精神をして平衡へ赴かしめる」と書く作家の、敗戦から7年を経た心の有り様、内面の不如意とそのきしみについて言っているのだ。

三島は明らかにこの旅で生を希求しこれをむさぼっている。これは三島を書き手としての私の勘だが、ホノルルからサンフランシスコを経てブラジルへ至り、いまパリの土を踏んだこの世界旅行は、作家にとってみずからの肉体と精神のきわどい平衡を自覚し、その「平衡を保ちつづけることが、精神の真の機能」「精神が真に存在するという証明」³⁷⁾ という認識を得た、その意味でおそらく初めての自己確認の旅であったと言ってよい。——すなわち精神と肉体の平衡の大切さを旅先で強く自覚せざるを得ないほど、三島はいま、生を希求していたのだと。

だからこう言ってよいだろう。三島にとって生きるとは心身の平衡にあった、と。そしてこの平衡を求める心の傾きが、言い方を変えれば、どうあっても生きる側に踏みとどまっていたという心中の欲望（と言ってよいと思う）が、この後三島をしてギリシアの太陽を見、イタリアのルネッサンスを再発見させるきっかけとなったのだ、と。本稿でたびたび引用される三島初の旅行記が「アポロの杯」という書名を与えられたのも、これが理由である。

もう一つ引用する。

肉体と精神とは、やはり男と女のようにちがっている。肉体はわれわれの身を護り、もし精神の異常な影響がなければ、進んで危険へ赴くものではない。肉体はわれわれを病菌や怪我から護り、これらに一度冒されれば、抗毒素や痛みや発熱でもって、警戒と抵抗を怠らない。しかし精神は自ら進んで病気や危険に赴く場合があるのだ。というのは、精神は時としてその存在理由を示さねばならぬ必要から、危機を招いてみせる必要に迫られる場合があり、さもないと、われわれの精神は頑強に、おのれの存在を信じようとしなないかもしれないのである。³⁸⁾

精神の危機は精神の「存在理由」を示すために必要だと三島は主張している。ここからはっきりと窺われるのは三島がおそらくは頻繁に「精神の危機」に見舞われていたという事実であるだろう。その危機を合理化し統合する術を、作家はこの時点では、まだ持っていなかった。それを求める永い旅に三島は赴き、三島はついには「行動」という観念にたどり着くのだが、今は先を急がないようにしよう。

ワルツやルンバを踊る馬や陽気なクラウン（ピエロ）たちが演じる幕間狂言を楽しんだ後、三島はパリを後にして、ロンドンの人となった。

11. 精神の錬磨

さて、パリは何度か訪れたことがあると先に書いた。パリを訪れたことのある人なら、あの独特の退嬰的な雰囲気は感じたことがあるだろう。誰も彼もがそっぽを向いて、好き勝手にめいめいの時間をむさぼりながら、それでいて誰も彼もが幸福感に満ちあふれ、結局は自由な、退廃の空気を思う存分に味わって、次なる快楽を求めてメトロの駅へ、角のカフェへ、公園へ、吸い寄せられていく、世にも稀な、中心を欠いたような混乱の時間を経験して、陶然とした覚えが。旅先にあって、まだ街角の意味も判らないままにこわばった精神が、その混乱の最中に一気にほぐされて、目の前に開けるパリの下町や、有名人が集ったというカフェや、レストランや、公園や、大作家が大小説に描いた一角を我が靴で踏みつけて、マレ地区の隠れ家や不穏な曖昧屋をおそろおそろ横目に過ぎ、大寺院がそびえ立つ丘からこの古い町並みを見下ろして、やっとの思いで歩き疲れた身体を引きずるようにしてメトロの階段を下りてまた上がる。カルチェラタンの町を背中に背負ってぐるとあたりを見回す—そのときに感じた絶対的な解放感。圧倒的な自由感。世界と自分とが対等に存在し、その二つをさまたげるものは何ひとつ存在せず、少なくともいまの自分のこの精神の高揚を上回る人間の感情は、どこにも、ひとつも、ないという唯一にして無二の実存の感覚。すべてが完全に、自由に、自分の前に開かれているという放埒な研ぎ澄まされた思い。その四方八方に広がって輝く精神の錬磨と高揚は旅人が町と出会う最も幸運な一瞬であるだろう。町と出会い、人と出会うというこの幸福を、しかし三島はパリで——どこであれ——覚えることはなかった。三島は書いている。「私は巴里が好きではなかった。」と。「巴里滞在を一か月半に及ぼしめたあの盗難事件ばかりではなく、巴里では私の心身を疲れさせる瑣事が次々と起こった」と。そしてついにはこう書いた、「一刻も早く私は巴里を遁れたかった。」³⁹⁾

そして1952年4月20日の日曜日、三島はパリにこう捨て台詞を残してロンドンの人となる。「忌まわしい巴里を遁れた喜びのために、(ロンドンの)郊外住宅の見事なローンや、小公園の池の反映や、日本のそれとまがうなつかしい褐色の光沢を帯びた葉と鄙びた紅い花をたわわにつけた山桜は、この上もなく美しく見えた。」⁴⁰⁾

ロンドンの街は三島に強い印象を与えたのだろうか。否。そうではない。滞在わずか4日、コヴェント・ガーデン帝室歌劇場でベンジャミン・ブリットン Benjamin Britten の歌劇「ビリー・バッド」(ハーマン・メルヴィル原作)を、フェニックス劇場でシェークスピアの喜劇「からさわぎ」を、英国アカデミー賞作品賞を前年に受賞したばかりのフランス映画の佳品「輪舞」(マックス・オヒュルス監督)を鑑賞した他は、作家はバスを使ってギルドフォードへ小旅行に向いたばかりであった。

そして三島はギリシアへ入る。

12. 太陽に乾杯

「希臘は私の眷恋の地である」「今日も私はつきざる酩酊の中にいる」⁴¹⁾ 悠久の時を経て、今まさに廃墟となりながら、人類の歴史の不可思議な塩梅によって永遠の生命を与えられたあの王城アクロポリスを前にして三島は、「今、私は希臘にいる。私は無上の幸に酔っている」とその酩酊ぶりを素直な筆で書いている。実は「アポロの杯」——本稿が絶えず参照しているこの不思議な旅行記——は、ここギリシアに至って、ようやく紀行文の体裁を取り始めると言っても、言い過ぎでは

ないだろう。なぜならそれは三島が「開かれた」からである。それまで劇場をはしごし、流行の映画をひやかし、路地もカフェも女も（これについては諸説あるが）、食事や酒もほぼ目もくれなかった三島がいま、日没に沈むギリシアの山々を凝然と眺め、「黄金にかがやく希臘の胃のような夕雲」を見て、「希臘」とつぶやく。そして花々にも等しい絢爛な比喻を織り交ぜながら懸命に旅にあることの幸福を語り出すのである。それも世界周遊の旅に出て4カ月目、ようやくここギリシアまで足を伸ばして初めて。どうしてだろうか。

ホノルルへ向かうウィルソン大統領の船上で日系の老婦人に皮肉な視線を向け、ニューヨークでは黒澤の名画をほぼ無視し、リオデジャネイロでようやく祭り気分に入るも、パリでもロンドンでも旅人になり得なかった。その三島がここギリシアではあられもなく旅にあることの幸福を語っている。「眷恋の地」などと言う言葉まで駆使して彼の地への恋心をあらわにする。感動を口にする。それはどうしてだろうか？

どうして？ どうしてかと言えば、一度は滅びて廃墟となったアクロポリス—ギリシアそのものが、つまりはギリシアの「死体」が時の風雪に洗われて気がついてみると輝かしい太陽の光をいっぱい浴びて現代に甦っている、その再生のイメージ、「転生」の実例をわれと我が目で見てそれが三島の琴線に触れたのだと、ここまで三島を書いてきた私はほぼ絶対の確信をもってそう考えている。

いつの頃からか自らを「死すべき存在」と幻視していた。これまで自ら死の側に立って自らの死に言及した文章をそれこそ数多く発表してきた。しかしこの世界周遊旅行の最中、三島はギリシアの「死体」を見て、その上に広がる大きな青い天蓋に包まれて確かに「再生」した。だからこそ、

「太陽に乾杯」一なるほど。

けだし付けも付けたりというべき書名ではないか。

13. おわりに

私は、本稿において、生来三島には「死」への傾きがあったことを指摘した。そして「アポロの杯」の旅の最中、リオデジャネイロでは旅にあることの陶醉を、ギリシアでは「輪廻転生」という観念を経てではあったものの「生」の強い欲動をそれぞれ感じたことを、三島の心の起伏の問題として、指摘した。幼年の平岡公威が心の裡で「死」に囚われていたことは、本稿にも引用された12歳のときの詩「寂秋」からも窺える。この通り、三島には「死」と「生」を往還する心の傾きがあった。

だが考えてみて欲しい。およそ日常生活を営むわれわれにあって、「死」と「生」の行ったり来たりを経験せざるを得ない瞬間など、日々どれほどの機会を訪れるものであろうか。

三島はこの意味で、三島由紀夫になる以前の幼い平岡公威の頃から、ある種の悲劇性を帯びた人格として、自身の「終わり」を意識しないではおれない心性に囚われていたと言ってよいだろう。

だがその三島にも、大らかに陽の光を浴び、旅のフィエスタに酔い、生きてあることの実存を思い切り味わった瞬間、瞬間があった。本稿は、その三島の裡に存在した「生」の欲動を、それを作家に与えてくれた旅の記憶に焦点を当てて解剖した、三島由紀夫の光の側面を巡る論考である。今後、1970年11月25日に発生した出来事の、当事者としての心のメカニズムを解明していくにあたって重要なモチーフが多々含まれていると、三島を書く者としての私は、強い確信をもって考えている。

前作で「事件」の概要と「青二才の軍医」の存在に迫った以上、本稿は当然のように書かれなくてはならなかった。いまだ熟し切っていない部分もあろうとは思いますが、取りあえず公にして、読者の叱正・ご批判に本稿を委ねたいと思う。

注

- 1) 三島由紀夫「アポロの杯」(新潮文庫) 8.
- 2) 同書, 8.
- 3) 同書, 13.
- 4) 同書, 13.
- 5) 同書, 14.
- 6) 同書, 18.
- 7) 同書, 20.
- 8) 同書, 21.
- 9) 同書, 23.
- 10) 同書, 23-24.
- 11) 同書, 26.
- 12) 同書, 26.
- 13) 同書, 39.
- 14) 「アポロの杯」という書名はギリシアの星座から取ったと三島本人が言っている。それによると、三島はこの本の扉の裏に、「ある日アポローンは使はしめの鴉にこの杯をわたして水を汲ませにやつた。」と、英文学者で天文学にも造形が深かった野尻抱影から聞いた話を紹介している。そして「怠惰で気の多い鴉は、道すがら見た無花果の樹の下で、その実の熟して落ちるまで待つたのち、水蛇(ヒドラ)つかんで飛びかへり、「この蛇がゐたので遅くなりました」と嘘言を奏した。その報いを以て鴉は水蛇と杯と共に星に変へられ、杯を目前にしながら、永遠の渇に苦しめられてゐるのである。」と三島はその由来を書くが、本稿で明らかにしたように、この説明はいかにも後付けの理屈と言うべきである。
- 15) Demuth, Charles. (1883年11月8日～1935年10月23日) ペンシルヴェニア州ランカスター生まれ。アメリカの水彩画家。対象を精密に眺め無機質な画風で描く所謂プレシジョンニズムの創始者として名高い。
- 16) 三島が見て感動したというDemuthのThe Figure 5 in Goldについては、別掲の写真を参照されたい。
- 17) アイリッシュは当時の即興演奏について書いている。「クラリネットの悲しげな音色を、合図に、狂気の演奏が始まった。／つづく二時間は、ダンテの描く地獄そののけであった。これがおわったあとも、実際にあったこととはとても信じられないだろう、と思われた。それはてんで音楽ではなかった。音楽はもっと快いものはずだ。それは、かれらの影がうつしだす魔の走馬燈であった。影は黒々と浮かびあがり、四方の壁の天井までふくれあがって揺らめいた。」(稲葉明雄訳「幻の女」早川書房214-215) 名手稲葉明雄にしては詰まらない訳だが、それはともかく、三島がこの音の興奮を味わわなかったのは残念であった。
- 18) 三島, 前掲書, 47.
- 19) 同書, 45.
- 20) 同書, 44.
- 21) 同書, 48.
- 22) 東京国際大学論叢に2016年発表した論文「三島事件の心的機序の研究——「仮面の告白」の虚偽を中心に——」37-39を参照のこと。
- 23) 三島, 前掲書, 48-49
- 24) 同書, 49.
- 25) 同書, 49.
- 26) 同書, 51-52.
- 27) 同書, 51-52.

- 28) 川端康成 三島由紀夫 「往復書簡」70.
- 29) 三島, 前掲書, 84.
- 30) 三島によると「われわれのすぐ目の前を, 登場人物たちがわれわれの存在に毫も気づかすにとおりすぎてゆくところ」(同書, 85-86)にこれら二つの芸能の類似はあると言う.
- 31) 川端康成 三島由紀夫, 前掲書, 52.
- 32) 三島由紀夫「アポロの杯」88.
- 33) 日本文学全集42 小林秀雄集(筑摩書房)426.
- 34) 三島, 前掲書, 94.
- 35) 同書, 94.
- 36) 同書, 94.
- 37) 同書, 97.
- 38) 同書, 96-97.
- 39) 同書, 102.
- 40) 同書, 103.
- 41) 同書, 108, 112.

引用文献(引用順)

- 三島由紀夫「アポロの杯」(新潮文庫, 昭和57年).
川端康成 三島由紀夫「往復書簡」(新潮社, 1997年).
小林秀雄「小林秀雄集 日本文学全集42」(筑摩書房, 昭和45年).
安藤武「三島由紀夫「日録」」(未知谷, 1996年).
三島由紀夫「決定版三島由紀夫全集 第42巻 年譜・書誌」(新潮社, 2005年).

参考文献(あいうえお順)

- いいだ・もも「三島由紀夫 その死とその世界」都市出版社, 1970年.
石原慎太郎「石原慎太郎対話集 酒盃と真剣」参玄社, 1973年.
石原慎太郎「三島由紀夫の日蝕」新潮社, 1991年.
猪瀬直樹「ペルソナ 三島由紀夫伝」文藝春秋, 1995年.
大谷敬二郎「二・二六事件 流血の四日間」図書出版, 1973年.
加藤周一他「日本人の死生観」上下 岩波新書, 1977年.
梶谷哲男「パトグラフィ双書⑦三島由紀夫 芸術と病理」金剛出版新社, 昭和46年.
軽部茂則「インパール ある従軍医の手記」徳間書店, 1979年.
佐渡谷重信「三島由紀夫における西洋」東京書籍, 昭和56年.
司馬遼太郎「世に棲む日々」文春文庫, 2003年.
澁澤龍彦「三島由紀夫おぼえがき」中公文庫, 1986年.
水津謙二「三島由紀夫の悲劇 病跡学的考察」都市出版社, 1971年.
杉原祐介・剛介「三島由紀夫と自衛隊 秘められた友情と信頼」並木書房, 1997年.
杉山隆男「兵士に告ぐ」小学館文庫, 2014年.
杉山隆男「兵士に聞け」新潮文庫, 2013年.
杉山隆男「『兵士』になれなかった三島由紀夫」小学館文庫, 2010年.
鈴木亜繪美「火群のゆくへ 元楯の会会員たちの心の軌跡」田村 司監修, 柏艸舎, 2005年.
戦時下の小田原地方を記録する会編「市民が語る小田原地方の戦争」, 2000年.
徳岡孝夫「五衰の人 三島由紀夫私記」文春文庫, 2015年.
中村彰彦「烈士と呼ばれる男」文藝春秋, 2003年.
日本学生新聞社編, 「回想の三島由紀夫」行政通信社, 1971年.
野坂昭如「赫奕たる逆光」文藝春秋, 昭和62年.
林 房雄, 三島由紀夫「対話・日本人論」夏目書房, 1966年.

- 福島次郎「三島由紀夫——剣と寒紅」文藝春秋, 平成10年.
藤井治夫「自衛隊クーデター戦略」三一書房, 1974年.
松本清張「昭和史発掘 9」文藝春秋, 1978年.
松本徹編著「年表作家読本 三島由紀夫」河出書房新社, 1990年.
松藤竹二郎「三島由紀夫 残された手帳」毎日ワンス, 2007年.
持丸 博, 佐藤松男「三島由紀夫・福田恒存 たった一度の対決」文藝春秋, 2010年.
三島由紀夫, 東大全学共闘会議駒場共闘焚祭委員会(代表 木村 修)「討論 三島由紀夫VS.全共闘〈美と共同体と東大闘争〉」新潮社, 1969年.
三島由紀夫「真夏の死——自選短編集——」新潮文庫, 昭和45年.
三島由紀夫「若きサムライのために」日本教文社, 1969年.
三島由紀夫「三島由紀夫語録」鷹書房, 1975年.
三島由紀夫「金閣寺」新潮文庫, 2003年.
三島由紀夫「荒野より」中央公論社, 昭和42年.
三島由紀夫「癡王のテラス」中央公論社, 1969年.
宮崎正弘「三島由紀夫『以後』」並木書房, 1999年.
宮崎正弘「三島由紀夫の現場」並木書房, 2006年.
村上建夫「君たちには分からない 『楯の会』で見た三島由紀夫」新潮社, 2011年.
山崎正夫「三島由紀夫における男色と天皇制」グラフィック社, 1978年.
山本舜勝「自衛隊『影の部隊』——三島由紀夫を殺した真実の告白」講談社, 2001年.
ラディゲ, レイモン「ドルジェル伯の舞踏会・肉体の悪魔」江口 清訳, 三笠文庫, 1952年.
「三島由紀夫研究③三島由紀夫・仮面の告白」鼎書房, 2006年.
「三島由紀夫研究⑥三島由紀夫・金閣寺」鼎書房, 2008年.

* 発行年は、引用文献・参考文献とも、奥付の表記をそのまま使用した。

